

(資料1)

湊築島弁天社(みなとちくしまべんてんしゃ)

員数：1件

所在地：愛知県豊橋市湊町7-2

所有者：神明社

1 登録理由

湊町公園の築島に建つ、三間社入母屋造向拝付の弁天社。三方に擬宝珠高欄付の縁がめぐる。外陣は吹放ちで格天井¹を草木画で飾り、内陣正面に格子戸をたて込み、背面に内々陣を突出する。
(登録基準：国土の歴史的景観に寄与しているもの)

注1 格天井：格縁と呼ばれる角材で碁盤目状に格子を組んで、その中に仕上げ板を張って仕上げた伝統的な天井様式。

2 概要

湊築島弁天社

木造入母屋造、本瓦葺、建築面積32㎡、建築年代 寛政7年(1795)

湊神明社の築島弁天社は、旧吉田城から豊川沿いを約500m下った湊町公園内にある。湊神明社自体の創建は白鳳期にさかのぼると言われるが、弁天社は戦国時代に琵琶湖の竹生島^{ちくぶしま}から弁財天を勧請し、後の1683年(天和3)に神明社境内に建立されたことに始まる。弁天社には1795年(寛政7)の棟札があり、建築年代が確認できる。明治初期、廃仏毀釈により弁天社には市杵島姫神命^{いちきしまひめのみこと}が祭られ、市杵島社と改名されたが、第二次世界大戦後に旧名に戻し築島弁天社と呼ばれている。

弁天社は、単層、入母屋造、本瓦葺の三間堂で、正面に向拝、正・側面に欄干付きの縁を廻している。身舎^{みや}の内部は前後に二分し、外陣と内陣としている。床は両陣とも板敷、天井は外陣が格天井、内陣は棹縁天井^{てう}と異なる。また、内陣には厨子を安置するための張出が付いている。外陣の格天井には、吉田藩御用絵師であった稲田文笠とその一門による四季折々の草木が描かれた絵がはめ込まれている。

注2 棹縁天井：天井板を棹縁で押さえて張る方法。



湊築島弁天社外観



外陣の格天井

(資料2)

森川家住宅主屋、書院、土蔵(もりかわけじゅうたくしゅおく、しょいん、どそう)

員数：3件

所在地：愛知県一宮市大和町苅安賀字北川田1159

所有者：森川覚子

1 登録理由

森川家住宅主屋

木造つし2階¹建の町家。間口7間の平入で、切妻造棧瓦葺。正面1階は東に戸口、西に格子を構える。2階は軒が出桁造²で、両端に袖卯建³、窓に格子を付ける。

(登録基準：国土の歴史的景観に寄与しているもの)

森川家住宅書院

主屋南西端に接続する、木造平屋建の離れ座敷。桁行4間半梁間3間で、寄棟造棧瓦葺とし、庭に面した東面と南面には銅板葺庇の広縁が付く。座敷は十一畳半、次の間十畳。北面の下屋に茶室と水屋が付く。(登録基準：国土の歴史的景観に寄与しているもの)

森川家住宅土蔵

主屋西面に蔵前を介して接続する土蔵造2階建。桁行7.6m梁間4.7mで、切妻造棧瓦葺。外壁は白漆喰仕上げで、高く下見板⁴を張る。東の蔵前に戸口、南妻に庇付窓。主屋とともに街路景観を形成する。(登録基準：国土の歴史的景観に寄与しているもの)

注1 つし2階：民家で、屋根裏を利用して設けた2階。物置や使用人部屋などに用いられる。

注2 出桁造：柱の上に載せた太い桁を店の前面に何本も突きだし其処に軒や屋根を乗せたもの。

注3 卯建：民家の、主に町家の屋根の横はしに付けられた塀のような構造物。

注4 下見板：古くから伝わる木造住宅などの外部板張の一種。横に羽重ねにして張り上げる板のこと。

2 概要

森川家住宅

・主屋

木造つし2階建、瓦葺、建築面積171m²、建築年代 安政2年(1855)/明治2年(1869)改修

・書院

木造平屋建、瓦葺、建築面積88m²、建築年代 明治35年(1902)頃

・土蔵

土蔵造2階建、瓦葺、建築面積51m²、建築年代 昭和初期

森川家は、苅安賀村の旧有力地主の一つで、天保年間～明治末期には酒造業を営んでいた。森川家住宅は、東西に延びる巡見街道⁵が村内で南東に向きを変える位置の南側に所在する。濃尾地震1891年(明治24)や伊勢湾台風1959年(昭和34)の被害などにより、何棟かの土蔵は失われたが、現在も主屋、書院、土蔵が残る。また、森川家21代の勘一郎(1887～1980)は、如春庵(じょしゅんあん)と称し、明治後期～昭和にかけての中京地区を代表する茶人である。本阿弥光悦⁶。作黒楽茶碗「時雨」(名古屋市:2007年国重要文化財)を所持し、茶室「舒嘯庵」(江南市に移築:市指定文化財)「如春庵」(名古屋市緑区に移築)を敷地内に構えていた。現在でも森川家住宅は、間口が大きく町並み景観を特徴付ける重要な建造物となっている。

主屋は、木造つし2階建、切妻造、平入、棧瓦葺の町家で、桁行7間、梁行(上屋)

6間の規模を持つ。正面には出格子を構えた下屋、背面には広縁となる下屋がそれぞれ廻る。1階東の戸口にはくぐり戸を組み込んだ大戸が付いている。内部は、土間の西側に2列6室が並ぶ。土間よりの3室は、正面から8畳の玄関、6畳の中間、10畳の勝手と続き、大引天井⁷である。その西列の3室は、正面から8畳の寝間、6畳の仏間、10畳の座敷と続き長押^{なげし}を廻し、棹縁天井としている。寝間東側の押入奥が土蔵につながる戸口となっている。座敷は床の間と天袋を備えた床脇の構成である。棟札から、建築年代は1855年(安政2)であり、1869年(明治2)の改築により棟木を後退させ、2階全体の天井高を確保したと思われる。

書院は、主屋の南西隅に接続する木造平屋建、寄棟造棧瓦葺の離れ座敷で、1902年(明治35)の建築と伝わる。内部は、南から11畳半の残月の間、10畳の次の間、さらに水屋を備えた6畳の茶室からなり、東・南側に下屋庇をかけ、広縁としている。天井を化粧屋根裏⁸とし、側筋に障子戸、その外部に雨戸をたてている。建具の上部は無双窓⁹を入れた欄間としている。残月の間は2畳の床の間を持つ構成で、表千家の残月亭を意識したものとされる。

土蔵は、敷地の北西角、主屋西面に蔵前を介して建つ。切妻造棧瓦葺、土蔵造の2階建で、石積の基礎を廻している。桁行4間強、梁間2間半で1、2階とも1室である。建築年代は昭和初期頃と伝わる。

注5 巡見街道：江戸時代に將軍の代替毎に幕府から派遣された視察役人・巡見使が通った道。

注6 本阿弥光悦：1558年(永禄元)～1637年(寛永14)江戸初期の書家、芸術家。書道の光悦流の祖。刀剣関係を家業とする京都の本阿弥家に生まれる。「寛永の三筆」の一人。

注7 大引天井：根太天井ともいい、2階床の裏を天井として扱ったもので床板と根太が見える形式の天井。

注8 化粧屋根裏：天井を張らず、小屋組みや屋根裏板などを鉋で削ったりし、化粧してそのまま見せるもの。

注9 無双窓：板を格子状に窓枠に取り付け、左右に動く建具(連子戸)をそれと同じ形状内側にはめ込んだ窓。



森川家住宅主屋外観



森川家住宅書院外観



森川家住宅土蔵外観

(資料3)

墨会館(すみかいかん)

員数：1件

所在地：愛知県一宮市小信中島字南九反11-1

所有者：艶金興業株式会社

1 登録理由

丹下健三設計のRC造事務所建築。台形敷地北辺の2階建事務室棟と南半の平屋建ホール棟を玄関車寄で接続する。1階外壁は非構造体で、上端にスリットを入れて採光とする。ダブルビーム¹の大梁、打放しコンクリートなど、丹下の初期作品の特徴が見られる佳品。
(登録基準：造形の規範となっているもの)

注1 ダブルビーム：2本のはりを平行に近接して架設する形式。

2 概要

墨会館

鉄筋コンクリート造平屋一部2階建、建築面積2,089㎡

建築年代 昭和32年(1957)

艶金興業株式会社は、^{すみうきち}墨宇吉₂により1889年(明治22)、旧中島郡起村に艶打ち₃を主とした艶屋として起業したことに始まる。その後、濃尾大地震後の明治26年(1893)に小信村に移った。その場所が墨会館の敷地である。1955年(昭和30)当時の社長墨敏夫は、「有限会社墨本社」を設立し、拠点施設として、墨会館を計画した。当時東京大学工学部建築学科助教授であった丹下健三₄が設計し、大林組名古屋支店により施工され、1957年(昭和32)8月に竣工した。

敷地は斜辺を西側に北東角を直角とした三角形であるが、北西角の一角を神社の敷地とし、角を丸めた台形になっている。敷地北側に事務室ブロック、南側に集会室ブロックを配し、両ブロック間は色付きテラカッタグリル₅の障壁で東西に分けられ、その東側に玄関車寄、西側に芝生の中庭がある。

建物は外部に対して閉鎖的で、車寄部分と集会室ブロックのバックヤード出入口以外の、1階部分全体がコンクリート壁で囲まれている。これは、周辺がノコギリ屋根の工場建築で、通りに対して開放的ではないため、同様な閉鎖的デザインを採用し、工場建築との統一感をはかったためと考えられる。外壁には限定数の窓と樋口のみが目立つが、これは同時期のコルビュジェ₆の作品を想起させる。また、外周壁部分は荷重を支えておらず、北側道路側をテラカッタグリル積みとする以外は、周壁上端と屋根部分との間に水平スリットを設けている。一方、内部空間は開放的で、丹下作品の同時期の倉吉市庁舎や香川県庁舎と同様な空間性を示している。

玄関車寄は、事務室ブロックと集会室ブロックとのつなぎの空間で、それぞれの入口が面する。車寄北側の事務室ブロックは、1階は吹抜けのある玄関ホールを中心に諸室を配する。北側の諸室はテラカッタグリル積みによる壁を介して北側道路に対し

て開いている。2階は玄関ホール吹抜けの階段から上がり、中央に社長室・応接室、西に重役室・会議室が並ぶ。2階部分は1階の閉鎖的な壁で構成される基壇または丘に建つ神殿のようで、企業グループのシンボル性が盛り込まれているように思われる。

一方、車寄南側の集会室ブロックは、平面が三角形となり、3つの空間に分けられる。玄関から直ぐの所に、長方形の多目的ホールがある。その西側は三角形のロビーで、ホールとの間仕切りは可動式である。中庭に面したスティールサッシュを開放すると、ホール・ロビー・中庭を一体的に利用することができる。ホール南側の三角形部分は、便所・配膳室・控え室・サービスヤードなどホールでのイベント等をサポートする部屋で構成されている。

建物構造は鉄筋コンクリートによる柱梁であるが、大梁をダブルビームとして小梁断面と寸法とのバランスをとり、香川県庁舎と同様、伝統を踏まえたコンクリート構造表現を追求した建築といえる。

- 注2 墨宇吉：1855（安政2）～1938（昭和13）、^{はたや}機屋が織った織物の仕上げの艶出しをする家に生まれた。その後、名古屋で行われた品評会で、栃木県の足利織物にすばらしさと脅威を感じた人たちに、宇吉は尾州織物の改良を頼まれる。並々ならぬ研究や努力の結果、目を見張る尾州織物を完成させた。
- 注3 艶打ち：織物の仕上げの一工程で、かまぼこ型になった石の台へ織物を乗せ、木槌で万遍なく打って艶を出すこと。
- 注4 丹下健三：1913（大正2）～2005（平成17）大阪生まれ、東京大学卒業。建築家で最も早く海外でも活躍し、「世界の丹下」と言われた。東大では、黒川紀章、磯崎新、谷口吉生などの世界的建築家を育てた。建築学会賞、従三位勲一等瑞宝章、文化勲章受章などを受賞。【国内主要作品】広島平和記念資料館（国重要文化財）、国立代々木競技場（代々木体育館）、東京都庁など。
- 注5 テラカッタグリル：中空の素焼き製ブロックを格子状に積んだもの。
- 注6 コルビュジェ：（1887～1965）スイス生まれのフランスの建築家で、近代合理主義を、モダニズムデザインという「新しい美学」へ進化させたといわれる。「近代建築の巨匠」「20世紀最も偉大な建築家」など、さまざまな言葉で称賛され、世界の都市のあらゆる建築に及ぼした影響は非常に大きい。国内の作品は、東京・上野にある国立西洋美術館（国重要文化財）。



墨会館（上空から）



墨会館（南から）



墨会館とノコギリ屋根の工場



墨会館車寄（北東から）



墨会館（北西から）

(資料4)

登録文化財の制度について

従来の文化財指定制度（国の指定）を補完する新しい保護手法として、平成8年10月の文化財保護法改正により導入された文化財保護制度。

特に優れた建造物を厳選して国宝・重要文化財に指定する制度とは異なり、外観を残せば内部の改修が自由に行えるなど、文化財建造物を活用しながら保存するという、欧米型の保護制度である。

登録の対象となるものは、建築後50年を経過した建造物で、かつ次のいずれかの基準に該当するものである。

- 1 国土の歴史的景観に寄与しているもの
- 2 造形の規範となっているもの
- 3 再現することが容易でないもの

また、建造物とは、具体的には住宅・工場・社寺・事務所等の建築物、橋梁・ダム・トンネル・堤防・水門等の土木構造物や煙突・塀などの工作物が該当する。

登録文化財の登録状況

(1) 本県について

現在登録済みの物件は答申分も含めて303件

今回の登録で合計308件となる。

(2) 全国について

登録文化財件数の累計は、今回の答申件数170件を加えて、7,179件となる。